

著書・論文 業績一覧

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会などの名称	概要
(著書) 1 幼児教育の設計	共著	1973.6.	ひかりのくに出版	大西憲明監修、佐藤三郎、田中敏隆、中塚善次郎、守屋光雄、山松質文他9名・414頁 第6章 幼児教育ではどう評価してゆくか、を担当。(pp.197-228) 概要：上記表題について次のように4つの節に分けて論じている。1.評価の意義と対象、では評価とは何か、および知能、性格、身体、環境、六領域の5つの評価対象について論じ、2.評価の方法、では、測定の信頼性と妥当性および具体的な評価方法として評定法、面接法、検査法、投影法、事例研究法の5つを述べている。また、3.幼児の個性の測定と評価、では、心誌法を中心に述べ、4.幼児指導要録の問題、では、具体的様式を示した。
2 実験とテスト - 心理学の基礎 - 実習編	共著	1979.3.	心理学実験指導研究会	柿崎祐一(編集代表)、生沢雅夫、今田寛、本吉良治、中塚善次郎、他27名・190頁 - 4 集団知能検査法および - 5 創造性の測定、を担当。(pp102-111) 概要：人格測定の実習をさせるため、2つのテーマについて、それぞれ、目的、方法、結果の整理、考察に分けて、指示や標準を示した。このテキストの指示通りに行えば、自然にテスト理論やテストの考え方が理解できるように配慮した。
3 実験とテスト - 心理学の基礎 - 解説編	共著	1979.3.	心理学実験指導研究会	柿崎祐一(編集代表)、生沢雅夫、今田寛、本吉良治、中塚善次郎、他27名・313頁 - 4 集団知能検査法および - 5 創造性の測定、を担当。(pp215-230) 概要：本書は、前書実習編の解説および参考となる事項を述べ、今後読むべき文献を数冊紹介するというもので、上記テーマについての基本的な事項がわかるように配慮した。
4 勉強のできる子・できない子	共著	1983.9.	創元社	北尾倫彦(編著)、松浦宏、杉村健、大日方重利、中塚善次郎、八田武志、228頁 第6章 障害をもつ子どもと勉強を担当。(pp.145-172) 概要：障害をもつ子どもとはどんな子をいうのか、障害種別と原因について述べたのち、障害児をもつ両親のストレスに言及し、障害児やその母が差別や偏見から解放され、幸福に生きて行けるためにはどんな考え方や哲学が必要かが述べられた。さらに、知的な発達に遅れがある子の勉強の方法についての基本的考え方、発達を無視した方法の誤りが指摘された。最後に、あまり世間に知られていない学習障害児ないし微細脳機能障害児の事例が紹介され、勉強のさせ方が述べられた。
5 WISC-Rによる知能診断	共訳	1983.4.	日本文化科学社	(共訳者)中塚善次郎、茂木茂八、田川元康、349頁 第4章WISC-Rの下位検査で測定される能力、第5章下位検査プロフィールへの攻究：実例と応

				用を分担。(pp.132-316) 概要：4章は12の下位検査のいくつかがグループになって測定されるさまざまな能力が表示されている。また、一般知能因子と各下位検査の特殊性が関連した問題として検討されている。5章と6章では、グループになって測っている能力を、プロフィールの中に見つけ出す方法について述べられている。最後に、説明のための事例報告が4例あげられ、総合的理解に役立つよう配慮されている。
6 内田クレペリン検査の新評価法	単著	1994.	風間書房	295頁 概要：この検査の普及度に比して明確でない測定内容をより明らかにするために、さまざまな研究を試みた。また、作業速度の変動のパターンの個人差をより有効に取り出す新しい評価法を提案した。これらの内容は5つの章に分けて述べられた。まず第1章では、内田クレペリン検査の歴史的な発展過程をおおざっぱにたどり、次いで2章では、3章で紹介されたこれまでの判定法ないし評価法が学業成績の予測という現実の場面で、いかなる妥当性をもつかが検討された。4章では、従来にはなかった新しい作業曲線の取り扱い方が検討され、5章では、この論文の中心をなす新しい評価法が2種類工夫された。最後に6章では、7章で工夫された2成分モデルの3つの測度、学習量、疲労量、波動量が標準化された。なお、この論文には、これまで発表した論文でクレペリンに関係したものは、全てまとめなおして含まれている。
7 人間精神学序説 - 自己統合の哲学的心理学の構築とその応用 -	単著	1994.12.	風間書房	230頁 概要：これまでに書いた6編(章)の論文と、新たに書き加えた2編(章)の論文を合わせて一冊の本とした。この中で、人間精神学という、心理学、哲学、教育学、宗教学など、人間の精神に関わる学問を統合した新たな学問領域を提唱した。それは、障害児の真に解放される社会を実現するためにである。そうした社会は、争いの止む社会であり、あらゆる人が幸せになる社会でもある。ここに収録した諸論文は、この人間精神学がどれほど実現可能であるか、を示すものである。その基本になるものは、「人間精神の心理学モデル」であり、「自己・他己双対理論」である。
8 学習障害研究における人間精神学の展開 - 新仮説の提唱および学習適応性尺度の構成 -	共著	2001.9.	風間書房	中塚善次郎、小川敦、246頁 基本哲学の提供、企画、構成、データ解析を担当。 概要：本書は、理論編と研究編とからなり、まず理論編では、自己・他己双対理論と人間精神の心理学モデルに基づいて、学習障害の「自我 - 人格機能障害仮説」を提唱した。これは、従来の認知障害説では理解が困難であった点を克服し得る、包括的な仮説となっている。次に研究編では、仮説の検証を目指して行った調査研究について説明している。第1研究における結果の分析を通じて、4因子10尺度からなる「学習適応性尺度(Adjustment Scales of Learning: ASL)」を構成した。ASLの4因子は、それぞれ、人間精神の心理学モデルの4つの精神機能領域に対応している。続く第2研究では、ASLを用いたさらなる調査を行ったところ、筆者らの新たな仮説が支持された。また、ASLによる学習障害診断法の構築が試みられ、簡便な判定やADHDとの鑑別などにも道を拓いた。

(上記以外著書 2編)				
(学術論文)				
1 高校学業成績の規定要因に関する研究	単著	1970.3.	教育心理学研究 (18巻1号pp.1-13)	概要：高校生の学業成績を規定する要因を検討するために、4つの研究を試みた。研究では、学業促進児、遅進児、統制群間での差を、4つの検査のうち、内田クレペリン検査の総合判定に見出した。結果の妥当性を研究において、正準・判別分析で確認し、意志的要因の重要性を指摘した。研究では、重相関法で知能検査とクレペリン検査の予測力が調べられた。その結果、クレペリンの方が予測力が高かった。研究では、正準相関法で知能検査、クレペリン検査、YG検査の予測力が調べられた。その結果、予測力の高さは上の順序であった。
2 内田クレペリン検査の作業曲線 - 2成分モデルによる解析 -	共著	1975.7.	心理学研究 (46巻2号pp.68-75)	〔執筆〕中塚善次郎、奥本隆昭。本人分担部分：共同研究につき抽出不可能。 概要：内田クレペリン検査の作業曲線の経過を、学習と疲労の合計で記述する非線形の数理モデルを構築し、そのモデルを一般的にどのような個人曲線にもあてはめることができるアルゴリズムを開発した。これにより、従来その普及度に比して測定内容が不明確であったこの検査の意味をかなり明確にすることができた。また、個人曲線へのモデルのあてはめで得られたパラメーターを曲線にあらわれた学習や疲労などの個人差を数量的にあらわす測度とする道がひらけた。
3 内田クレペリン検査の数量的処理による高校学業成績予測力改善の試み	単著	1975.3.	大西憲明教授退任記念・大阪市立大学心理学教室25年のあゆみ (論文集) (pp.203-223)	概要：期待増加率、実際増加率、初頭努力率前期、同後期、プロフィール得点 (Pfi)、誤診数、平均作業量の内田クレペリン検査の各測度が、次の新しい曲線の数量化によって、その予測力をいかに改善するかを検討した。1. 個体内作業量の順位がなすパターンの数量化、および、辻岡式の因子得点化、によるものである。その結果、前者ではかなりの改善がみられたが、後者の方法ではあまり改善されなかった。
4 きき手テスト作成の試み	共著	1975.3.	大西憲明教授退任記念・大阪市立大学心理学教室25年のあゆみ (論文集) (pp.224-247)	〔執筆〕八田武志、中塚善次郎。本人はデータ解析とそれに関する部分の執筆を担当。 概要：わが国で初めてのきき手テストの標準化をテスト理論にもとづいて行った。その結果、10項目からなるテストを作成し、その実施結果を外国の研究と比較検討した。
5 Note on hand preference of Japanese people	共著	1976.10.	Perceptual & Motor Skills (p.530)	〔執筆〕八田武志、中塚善次郎。本人はデータの解析を担当。 概要：われわれが既に標準化したきき手テストを用いて測定した結果を欧米の結果と比較した。被験者は男488人、女711人、合計1,199人である。左ききの人の割合は男4.30%、女2.25%で、両群間には5%の有意差があった。これは、女性の方がよりきつい矯正をうけたためと考えられた。また、両群の平均比率は3.07%であったが、この値は欧米の値とよく符合するものであった。
6 内田クレペリン検査における曲線類型のクラスター化	単著	1977.2.	名城大学教職課程部紀要 (9巻pp.49-59)	概要：内田勇三郎が確立した曲線類型の判定は直観的なもので、熟練者間でも60~70%という判定の一致率しか得られない。また、電子計算

				機を用いた自動判定でも限界があり、同様の結果が得られている。この原因は、各類型が明確なクラスターをなさないことである、という仮説にもとづき、5類型の70曲線を抹数量化法類で分析した結果、この仮説は支持された。
7 分散分析手法による内田クレペリン検査作業曲線の分析	単著	1978.2.	名城大学教職課程部紀要(10巻pp.47-57)	概要:255人に4年間を経て実施したデータの各個人内の標準偏差の再検査相関係数は0.63とかなり高いものである。しかし、このままではこの値は、心理学的意味が不明確である。そこで、この分散を分散分析モデルによって、2成分モデルの学習量、疲労量、波動量に対応した分散に分離することを試みた。その結果、再検査相関係数も高く、2成分モデルの対応する測度ともきわめて相関の高い値が得られた。また、内田の判定ともよく対応するものであった。
8 心身障害児の知能構造() - WISCにみられる脳性まひ児の因子構造 -	共著	1978.12.	心理測定ジャーナル(14巻12号pp.7-14)	〔執筆〕中塚善次郎、田川元康。本人はデータ解析と論文の執筆を担当。 概要:脳性まひ児の知能構造の特質を普通児との比較を通じて明らかにしようと試みた。脳性まひ児521人に実施したWISCの結果を因子分析し、Wechslerの標準化データを因子分析した結果と比較した。その結果、脳性まひ児の因子配置には、普通児には見られない独自の特質があった。その特質を「注意の転導性」と名づけた。
9 肢体不自由児の性格特性 - 矢田部ギルフォード(Y-G)性格検査結果の分析 -	共著	1978.12.	特殊教育学研究(16巻2号pp.14-25)	〔執筆〕中塚善次郎、田川元康。本人はデータ解析と論文の執筆を担当。 概要:肢体不自由児の心理的・行動的特徴を調べるために、養護学校中学部1年生124人にY-G性格検査を実施し、その反応傾向を分析した。分析での主な結果は、3つの反応選択肢のうちの中間反応(?)が多く、パーソナリティーの未熟性が指摘された。分析での主な結果は、12尺度の因子分析から明らかになったものであるが、肢体不自由児では、主導性をなすAとS因子の因子配置が特徴的であり、社会性の未発達性が指摘された。
10 少年の非行化傾向に関する研究 - 特に問題行動を中心として -	共著	1978.12.	教育心理学研究(26巻4号pp.1-10)	〔執筆〕金児暁嗣、中塚善次郎。共同研究につき本人担当分抽出不可能。 概要:低年齢の非行傾向を明らかにするため、小学校5年生を対象に質問紙調査を行い、問題行動に影響を及ぼす環境的要因の多元的把握を因子分析によって試みた。その結果、学校不適応、親子間の葛藤、父親による拘束の寛厳、刺激的遊びの4因子が抽出された。次の典型的問題児17名について、問題児・非問題児を識別する23項目への反応パターンを抹数量化法類で分析し、問題児の分類を試みた。その結果、問題児は5つの群に分類された。
11 心身障害児の知能構造() - WISCにみられる精神薄弱児の知能構造 -	共著	1979.1.	心理測定ジャーナル(15巻1号pp.3-9)	〔執筆〕中塚善次郎、田川元康。本人はデータ解析と論文の執筆を担当。 概要:これまで何人かの研究者が、WISCを用いた研究で精神薄弱児の知能の因子として記憶痕跡の因子を抽出している。ここでも精神薄弱児および脳性まひ児の低知能の子どものWISCの結果を分析して、この因子について検討を加えた。その結果、この因子はかなり微妙な因子で、被験者の諸条件の影響をうけやすく、出現

12	分散分析手法による 内田クレペリン検査作 業曲線の分析()	単著	1979.1.	名城大学教職課 程部紀要(11巻 pp.1-6)	したりしなかつたりすることが明らかになっ た。 概要：7で述べた論文の続編である。前論文 の結果を受けて、モデルの改善を試みた。それ らの結果は、学習のバラツキに正負の符号を つけたこと、疲労のバラツキの計算に2成分 モデルの学習曲線を利用して、よりきめこまか い値としたこと、波動のバラツキの計算に も、より値が安定するように工夫をこらしたこ と、である。これらにより、2成分モデルの対 応する測度とのきわめて高い相関が得られた。 また、再検査相関係数も2成分モデルのそれと 遜色ないものとなった。
13	内田クレペリン検査 の作業曲線 - 2成分 モデルによる柏木式期 待曲線の分析 -	単著	1979.8.	心理学評論 (20巻4号 pp.321-347)	概要：柏木は各人の平均作業量に見合った 「期待曲線」を提案しているが、この期待曲線 を4種類準備し、2成分モデルで分析した。そ の結果、3つの期待曲線で推定されたパラメー タに統計的に扱えないきわめて極端な値が出現 した。テストとして使用するために「疲労量」 と「学習量」を定義しこの欠点を克服した。次 に柏木式のPfiをこの結果を用いて分析し、波動 成分と偏モデル成分に分解することが可能とな った。ここで求めた各測度の信頼性が検討され た。
14	心身障害児の知能構 造() - 脳性まひ児 に実施したWISC知能診 断検査のプロフィール の分析 -	共著	1980.2.	和歌山大学教育 学部紀要 教育 科学(29巻 pp.123-121)	〔執筆〕中塚善次郎、田川元康。本人はデー タ解析と論文の執筆を担当。 概要：WISCの12の下位検査のなすプロフィー ルを分析することによって、脳性まひ児の知能 構造の特徴を明らかにすることを目的として、 2種類のデータをIQで6つに区分し、別々にプ ロフィールを描いた。その結果、両群のプロ フィールはよく似ており、プロフィールの安定 性が高いこと、高IQのプロフィールは、WAIS での脳血管損傷者のプロフィールときわめてよ く似ていること、などが明らかとなった。
15	Reynell Developmen tal Language Scale (R.D.L.S)の紹介と日 本での実施の試み	共著	1981.6.	児童精神医学と その近接領域 (22巻3号pp.63 -72)	〔執筆〕長尾圭造、安田寿、中塚善次郎、中 脩三。本人は主として統計計算を分担。 概要：英国で標準化された乳幼児言語発達検 査のR.D.L.Sを翻案し、日本向きに標準化しな おした。その結果、テスト項目が、2歳6ヶ月 以下で発達を識別するものに偏っていること、 発達曲線にならない項目があったこと、など が明らかになった。結論として、日本の幼児 には独自の言語発達検査の開発が必要であるこ とが指摘された。
16	解析的評価法による クレペリン検査の標準 化(博士論文)	単著	1982.3.	大阪市立大学 (1982年 図表 等を含め400字 詰原稿用紙470 枚)	概要：著書欄の6で述べた、『内田クレペ リン検査の新評価法』と同様である。
17	母親像と母性意識の 関連性	共著	1983.12.	夙川学院短期大 学紀要(8巻pp. 63-78)	〔執筆〕大江米二郎、中塚善次郎。本人はデー タ解析と因子の解釈を担当。 概要：最近、子どもたちの非行や問題行動の 増加に対して、「母」が問われることが多い。 そこで、やがて母となる女子大生を対象に、質 問紙により母親の認知像と母性意識の構造を 検討した。その結果、両者は互いに関連して お

18 障害児をもつ母親のストレスの構造()	単著	1984.3.	和歌山大学教育学部紀要 教育科学(33巻 pp.27-40)	<p>り、両方の質問項目を込みにして因子分析した結果、次の5つの因子が抽出され、解釈された。1.母性イメージ、2.子どもへの関心、3.母の客観的評価、4.母の社会的有能さ、5.自我の充足性。</p> <p>概要：障害児をもつ母親が強いストレスにさらされていることは、多くの研究者によって指摘されてきた。こうしたストレスの測定とその構造の解明を目的として、次の5つの測定尺度が構成された。1.社会的圧迫感、2.障害児をもつ負担感、3.不安感、4.療育探求心、5.発達可能性への期待感。これらの尺度は、前の3つと後の2つがクラスターをなすことが明らかとなった。</p>
19 大学生の精神薄弱児・者に対する意識態度	共著	1984.3.	和歌山大学教育学部研究所報(7集 pp.23-32)	<p>〔執筆者〕中塚善次郎・柑本正三。本人はデータ解析と論文執筆を担当。</p> <p>概要：世間には障害児・者に対する偏見や差別が存在している。それらの除去には教育の果たす役割が大きい。そこで将来教育に携わる教育学部の学生の精神薄弱児・者に対する態度がどんなものであるのかが検討された。その結果、次の順に精神薄弱児・者に対して好意的で、理解が高かった。1.特殊教育を専攻し、養護学校教員免許の取得希望をもつ者、2.それらのうちのどちらかに該当する者、3.どちらにも該当しない者、4.経済学部の者。また、経済学部の中では、障害児・者とのかわりがあった者がいない者よりも好意的で理解があった。</p>
20 脳障害児の感覚統合訓練に関する研究	共著	1984.3.	和歌山大学教育学部昭和58年度特定研究報告書(総25頁)	<p>〔執筆者〕中塚善次郎・橘英彌・田川元康。本人は研究の企画、実施、論文の執筆を担当。</p> <p>概要：感覚統合的な治療をPiaget流の発達の視点から、5歳の3人の自閉症児に1年間にわたって実施した。感覚運動期にある子どもの環境との相互作用を、感覚運動的刺激によって促進しようとする本治療法は、自閉症児の3つの特徴のうち、「環境からの引きこもり」の改善にもっとも効果があり、3人と人とのコミュニケーションが著しく改善された。しかし、「ことば」の改善にはあまり効果がなかった。「同一性保持」の傾向は、かなり改善されたが、完全にはなくならなかった。</p>
21 障害幼児に対する両親の養育態度要因とその両親間における類似性	単著	1985.8.	教育心理学研究(36巻2号 pp.152-160)	<p>概要：1人の幼児に対する父と母の養育態度を、障害児200名、健常児200名について、田研・両親態度診断検査で測定し、その結果を因子分析法と正準相関法で分析し、両群間で比較した。父母とも尺度値の上では、障害児群の養育態度に問題があったが、因子構造は等しかった。しかし、正準相関分析の結果、健常児群では両親の態度は、因子単位で共変動するが、障害児群では両親間で共変動することが少ないだけでなく、「拒否」と「干渉」という臨床上好ましくない態度で共変動することが明らかとなった。</p>
22 UPI(University Personality Inventory) 質問項目の尺度化	共著	1985.3.	和歌山大学教育学部研究所報(8集 pp.13-21)	<p>〔執筆者〕宮西照夫、中塚善次郎。本人は解析を担当。</p> <p>概要：UPIは全国大学保健管理協会が作成したもので、精神的・身体的に何らかの不健康さを問う60の項目からなっているが、これまで統計的に有効な処理がなされていない。そこでより</p>

				有効な予知方法の確立をはかることを目的として、因子構造を明らかにし、各因子の尺度化を行った。また、尺度の妥当性を若干検討した。因子分析を行った結果、次の5尺度が構成された。1.抑うつ傾向、2.心気症傾向、3.活動性、4.対人不信、5.神経症傾向。これらの各信頼性係数は満足できる値であり、尺度間の相関も納得できるものであった。次にUPIをスクリーニング検査として入学生に実施したところ、神経症群は十分予知および早期発見が可能であるが、疾病群では現行の方法では不十分であることがわかった。
23 障害児をもつ母親のストレスの構造()	単著	1986.3.	和歌山大学教育学部紀要 教育学(34巻 pp.5-10)	概要：()を除く同じ表題の論文で、障害児をもつ母親のストレスをはかる5つの尺度を構成したが、これらの尺度のうち第 尺度と第 尺度では質問項目が8つと7つであり、テストとしての目標である10個にすることを目的とした。尺度 と尺度 に属すると考えられる項目を9項目工夫し、前回構成されている45項目と合わせて54項目からなる質問紙を86名の障害児の母親に実施した。第 と第 尺度をあらためて因子分析した後10個に再構成したところ、信頼性係数は顕著に高くなっており、追加項目が適切であったことがわかった。また、採点の便宜をはかるために得点の付け方が調整され、簡単に実施できるストレス尺度が完成した。
24 自閉症候群の行動的研究() - 自閉性チェックリスト作成の手がかり -	共著	1986.3.	和歌山大学教育学部研究所報(9集 pp.74-99)	〔執筆〕中塚善次郎、藤居真路。本人は企画、データ解析、執筆を担当。 概要：世界ではじめて「自閉症」として11の症例がカナーによって発表されて以来、すでに半世紀が経過した。これまでの自閉症チェックリストと診断基準の欠点を指摘し、新しい自閉症診断法の開発とそれによる自閉症候群の行動的特徴の解明をめざす。その第1歩として、自閉症児の示す行動特性とされた項目を自閉症研究の文献から集め、それを整理して324項目のチェックリストを作成した。その質問紙を自閉症児35名と、非自閉症の障害児47名の母親に評定してもらい、両群のそれら各項目への反応差から、自閉症をより明確に記述すると考えられる項目155個を抽出し、それら項目の平均点の分布を両群間で比較した。
25 自閉症候群の行動的研究() - N式自閉傾向測定尺度の構成と自閉症診断法の構築 -	共著	1986.3.	和歌山大学教育学部紀要 教育学(35巻 pp.71-99)	〔執筆〕中塚善次郎・藤居真路。本人は企画、データ解析、執筆を担当。 概要：前回の研究に引き続き、155項目を因子分析して5因子を抽出し、その結果から11尺度を構成した。この11尺度をあらためて因子分析し、3因子を抽出。それらは 社会性因子、覚醒・感覚因子、 同一性保持因子と命名された。さらに自閉症診断法構築のために、各因子の得点をタオ・タイトルを参考に3段階に区分し、3つの因子の組み合わせで類型を設定した。各類型への両群の分布はかなり分離しており、この方式が自閉症診断に有用であることが述べられた。
26 日本幼児の言語発達能力の標準化(第1報) - 検査内容および結果の概要 -	共著	1986.3.	安田生命社会事業・研究助成論文集(22号No.2 pp.97-105)	〔執筆〕長尾圭造、中塚善次郎、中脩三、他2名。本人はデータ解析を担当。 概要：現在、日本の乳幼児に対して、臨床的にかつ信頼性の高い言語発達検査がない状況の中で、乳幼児の言語理解発達検査を作成する試

				<p>みを続けてきた。本研究では、その検査の標準化を進めるとともに、日本の幼児の言語発達の特徴を明らかにすることを目的とした。本検査は合計18セクション63項目からなっている。対象児は2歳から6歳6ヶ月までの968人であり、マニュアルにそって検査者が実施した。検査結果から年齢ごとの通過率曲線を描き、各年齢群で信頼性係数と平均得点を算出した。さらに検査の構造を調べるために因子分析を行った。その結果、このテストは2：0より6：6まで用いることが出来ることと、幼児の言語能力を異なった3側面から捉えることが出来ることが示された。</p>
<p>27 日本幼児の言語発達能力の標準化(第2報) - 幼児期言語表出能力の標準化過程 -</p>	<p>共著</p>	<p>1987.3.</p>	<p>安田生命社会事業・研究助成論文集(23号No.2 pp.97-109)</p>	<p>〔執筆〕長尾圭造、中塚善次郎、他4名。本人は主として統計計算を担当。</p> <p>概要：幼児期の言語表出能力について、1.対象を表すことばの発達、2.動作を表すことばの発達、3.ものの用途を聞かれたときの答え方の発達の3部にわたって報告した。ものの用途を聞く場合、言語刺激だけの応答2：0ではできないが、2：0～3：0にかけて急速に言語化できる。用途を表す一定の慣用語による表現は、発達とともに増加し定着する。用途を表す一定の語が定着するまでには語によりさまざまな表現がなされる。年齢により表現内容に特徴があり、それが児の心理発達の特徴とも関連していることがわかる。幼児の表出言語は、先に慣用的表現が獲得され、後にその表現の意味するところが獲得されることもある。今後テストとして形態を整える課題が残った。</p>
<p>28 自閉症候群の行動的研究() - 診断類型と発達(津守式乳幼児精神発達質問紙を用いて) -</p>	<p>共著</p>	<p>1987.3.</p>	<p>鳴門教育大学研究紀要 人文・社会学編(2巻 pp.1-16)</p>	<p>〔執筆〕中塚善次郎、藤居真路。本人は企画、データ解析を担当。</p> <p>概要：自閉症児の示す特徴的な行動と、精神発達との関係を調べるために、N式自閉傾向測定尺度と津守式乳幼児精神発達質問紙とを用いた。その結果、津守式乳幼児精神発達質問紙の得点は、N式自閉傾向測定尺度の覚醒・感覚因子と、同一性保持因子の得点とかなりの関連を持つこと、特に津守式乳幼児精神発達質問紙の理解・言語領域の得点は、N式自閉傾向測定尺度の同一性保持因子の得点とかなり強い関連があることが明らかとなった。よって、これまで異常行動とみなされてきた特有の行動は、自閉症児の精神発達の一つの表れであることが指摘された。</p>
<p>29 障害児をもつ母親のストレス要因() - 子どもの年齢、性別、障害種別要因の検討 -</p>	<p>共著</p>	<p>1987.3.</p>	<p>鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(1巻 pp.39-47)</p>	<p>〔執筆〕蓬郷さなえ、中塚善次郎、藤居真路。本人は解析を担当。</p> <p>概要：中塚のストレス尺度を使って、発達障害児の母親のストレス規定要因が分析された。主な結果は次の通り。子どもの各年齢段階で特徴的なストレスが存在すること。小学校・中学校(部)入学、高等部進学後はストレスはいずれも軽減すること。性別では男児群の方が高いこと。障害種別ではダウン症群が低く、順次精神遅滞児群、脳性まひ児群、自閉症児群と有意に高いこと。自閉症児群、脳性まひ児群で発達期待感は低いが、精神遅滞児群では高く、脳性まひ児群は社会的圧迫感が高いこと等である。これらの結果はストレス尺度に妥当性が存在することと、障害児の母親の心理的援助を行うにあたって、これらの要因を考慮することの必要性を示している。</p>

30 N式自閉傾向測定尺度の作成とその利用 - 自閉症研究、教育に対する一提言 -	共著	1988.10.	発達(8巻32号 pp.69-76)	<p>〔執筆〕藤居真路、中塚善次郎。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>概要：本書は特殊教育に携わる教師、研究者や養育者に広く購読されている啓蒙書であるので、N式自閉傾向測定尺度を用いて得られた自閉症児の発達の様子を概観し、既成の発達理論との統合を試みた。</p>
31 N式自閉傾向測定尺度と自閉症教育プログラム - 自閉症研究、教育に対する一提言 -	共著	1988.1.	発達(9巻33号 pp.80-87)	<p>〔執筆〕藤居真路、中塚善次郎。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>概要：N式自閉傾向測定尺度でみた、自閉症児の予後について言及された。また、独自に開発された自閉症教育プログラムの基本構想が述べられた。</p>
32 自閉症児の胎生期・周生期障害 - N式自閉傾向測定尺度との関連性の検討 -	共著	1988.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(2巻 pp.11-20)	<p>〔執筆〕蓬郷さなえ、中塚善次郎。本人はデータ解析を担当。</p> <p>概要：自閉症児の胎生期・周生期障害とN式自閉傾向測定尺度との関連が、統制群である自閉症以外の障害児との比較を通じて検討された。その結果、自閉症児にとって妊娠中に母体に異常があると同一性保持に属する異常行動が多く見られるようになること、また、仮死で出生した場合、覚醒・感覚因子に属する行動が相対的に見られなくなること等が明らかにされた。</p>
33 自閉症以外の障害児に見られる自閉症候の特徴 - N式自閉傾向測定尺度による検討 -	共著	1988.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(3巻 pp.143-154)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、藤居真路。本人は企画、データ解析を担当。</p> <p>概要：自閉症の症候は、自閉症児にだけ特徴的な行動ではなく、自閉症以外の障害児にも見られることから、N式自閉傾向測定尺度を用いて、その構造を自閉症児の場合と比較した。その結果、非自閉症障害児の因子構造は自閉症児のそれとほぼ一致しており、しかも加齢に伴う11尺度の推移はかなり似た点が認められた。よって、自閉症の症候は多くの障害児に共通な生活年齢座標で推移する生理的発達に依存していることが示された。</p>
34 自閉症候の経年的変化 - N式自閉傾向測定尺度による検討 -	単著	1988.4.	児童青年精神医学とその近接領域(29巻2号 pp.41-50)	<p>概要：N式自閉傾向測定尺度の因子妥当性を検証することを目的として、102名の自閉症児全群およびそれらを奇偶折半した計3群について、別々に因子分析した。その結果、3群の分析結果は相互によく一致し、どの群でも因子妥当性は高かった。次に経年的推移を調べるために、4歳から18歳にわたる15年齢群で11尺度ごとの得点の平均を求め、その推移をグラフ化した。また、年齢推移プロフィール間の相関行列を求め因子分析した。その結果、3因子内での推移はよく一致しており、年齢推移に関しても因子別にまとまっていることが明らかとなった。</p>
35 「折れ線型」自閉症の乳幼児期における行動特質	共著	1988.8.	児童青年精神医学とその近接領域(29巻4号 pp.64-73)	<p>〔執筆〕藤居真路、中塚善次郎。本人はデータ解析を担当。</p> <p>概要：「折れ線型」自閉症に特徴的行動であるとされてきた23項目からなるチェックリストが作成され、自閉症児27名と非自閉の障害児60名の母親に評定してもらった。自閉症児だけの回答結果をもとに因子分析が行われ、3つの尺度が構成された。次いで3尺度の個人得点が算出され、両群間で比較された結果、3尺度のもの</p>

36 自閉症児の発達過程 - 津守式乳幼児精神発達質問紙の横断的資料による検討 -	共著	1988.11.	特殊教育学研究 (26巻3号pp.11-22)	<p>つ意味が検討され、「折れ線型」自閉症の判定基準を「外界とのかわり尺度」の合計点が10点以上と決定した。</p> <p>〔執筆〕中塚善次郎、蓬郷さなえ。本人は解析、論文執筆を担当。</p> <p>概要：自閉症児の発達の経年的変化を明らかにするため、2歳から12歳にわたる214名の自閉症児と、それに年齢ごとの人数と発達水準をマッチングさせた自閉症以外の障害児とに、津守式乳幼児精神発達質問紙を実施し、5つの領域ごとおよび314個の項目ごとに通過率の経年的変化（発達曲線）を両群間で比較した。その結果、次のことが明らかにされた。両群間で通過率に最も大きな差があるのは、社会領域であり、最も差が小さいのは言語領域である。しかし、言語で自閉症児が高い通過率を得るのは、「特異な能力」に関係した項目であり、対人相互交渉や状況理解を伴う項目では低い通過率しか得られない。自閉症児の中の発達良好群は6歳から8歳にかけて急伸期が見られている。</p>
37 年長自閉症児（者）の自閉症候と社会生活能力	共著	1988.11.	児童青年精神医学とその近接領域 (29巻5号pp.18-27)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、蓬郷さなえ、後藤弘。本人は解析と論文執筆を担当。</p> <p>概要：自閉症児の予後としての社会生活能力が、その時点で存在する自閉症候といかに関連しているかを明らかにするために、新版S-M社会生活能力検査とN式自閉傾向測定尺度とが18歳から27歳の自閉症児31人に実施された。そして、その検査結果が正準相関分析法で分析され、次のことが明らかになった。2つの検査で測られた自閉症候と社会生活能力とはきわめて強い関連を持っていること。社会生活能力が高い者は、同一性保持因子に属する自閉症候が依然として出現しているが、社会性障害は軽減している。逆に社会生活能力が低い者はその逆の傾向があることである。</p>
38 障害児をもつ母親の養育態度 - 障害種別による差異 -	共著	1988.12.	小児の精神と神経 (28巻4号pp.31-36)	<p>〔執筆〕蓬郷さなえ、中塚善次郎。本人は解析を担当。</p> <p>概要：障害児をもつ母親は健常児をもつ母親に比べ、養育態度に偏りが多いと言われているが、それは子どもの障害種別により、どう異なっているかを調べるために、肢体不自由児、ダウン症児、自閉症児、MBD、情緒障害児、精神遅滞児の母親127名に田研式親子関係診断検査を実施した。その結果、肢体不自由群で「干渉」、ダウン症群と自閉症群で「溺愛」が危険地帯にあった。また、情緒障害群、精神遅滞群で親中心的態度が強く見られ、逆に子ども中心的態度であるのは自閉症群とダウン症群であった。</p>
39 障害児をもつ母親のストレスと家庭における夫婦の役割分担について	共著	1989.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育学編 (4巻 pp.139-149)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、蓬郷さなえ。本人は解析と執筆を担当。</p> <p>概要：障害児をもつ夫婦間には不和が生じたり、養育態度での不一致が生じやすいと言われるが、その原因の一つに夫婦間の家事における役割分担をめぐる問題が考えられる。そこで、障害児119名の母親に50項目の家事分担の「期待」と「現実」を問い、その評定の差を「不満」とみなした。この不満得点50項目による因子分析の後、不満尺度を構成し、ストレス尺度との関連を見た。その結果、役割分担の不満は発達期待感とのみ関連があり、他の4つのストレ</p>

40 自閉症児をもつ母親のストレス - 文章完成法に見られる母親のストレス -	共著	1989.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(3巻 pp.31-35)	<p>ス尺度との間では有意な相関は見られなかった。したがって、母親のストレスの多くは家事の不満度と直接的な関係はもっておらず、社会的な繋がりの中で生じていると考える方が妥当であると結論された。</p> <p>〔執筆〕大西久男、中塚善次郎、蓬郷さなえ、宮崎令子。本人は企画を担当。 概要：自閉症児をもつ母親の心理を投影法の1つである文章完成法で調べた。対象は、自閉症児と非自閉症の障害児、および先天的に下肢の奇形をもつ子どもの母親であり、文章完成法の刺激文は障害認知時、現在、その過程のことについて問う6文であった。採点は言語生産量、反応文の表現レベル、自我関与度に注目した。結果は、子どもの障害の種類によって、そのパターンが異なること、および、時間の経過で母親の心理が変化することが示された。</p>
41 自閉症児の家庭教育	共著	1989.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(3巻 pp.103-112)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、大西久男、蓬郷さなえ、原田和幸。本人は論文執筆を担当。 概要：自閉症の新しい捉え方として、N式自閉傾向測定尺度とそれによる自閉症研究の概要が示された。また、自閉症児の親は子どもがコミュニケーション障害をもつことのために、他の障害児の親にくらべてより重いストレスを感じているが、このストレスを減らすためには自らの手による家庭教育が重要であることが指摘され、次いで、N式自閉傾向測定尺度を用いて明らかにされた、3つの領域別に従来から用いられてきた療育方法が再編成された。</p>
42 家庭における父母の養育態度と子どもの情動表出行動	共著	1989.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(3巻 pp.47-54)	<p>〔執筆〕蓬郷さなえ、中塚善次郎。本人は解析を担当。 概要：幼児の情動表出行動は環境から多大な影響を受けていると考えられる。そこで、質問紙で捉えられた両親の養育態度との関連を探ることが目的である。その結果、子どもの情動表出行動と有意に高い相関がある養育態度の次元は、父と母で違う。父の態度が干渉的・溺愛的であるほど、また、母親が拒否的・支配的であるほど、子どもの情動表出行動はよく見られる。さらに、子どもと両親の性別による組み合わせで、異なった相関結果が見られ、情動表出行動と両親の養育態度との間の密接な関連が指摘された。</p>
43 年長自閉症児・者の教育的・社会的処遇状況と社会生活能力	共著	1989.5.	発達障害研究(11巻1号 pp.49-57)	<p>〔執筆〕後藤弘、中塚善次郎、蓬郷さなえ、原田和幸。本人は論文執筆を担当。 概要：18歳から27歳までの年長自閉症児を対象に、現在の彼らの社会適応状況を、客観的・操作的に捉え、それが、彼らの現在の、またはこれまでの社会的な処遇状況といかに関連しているか、また、彼らが受けてきた教育や治療といかに関連しているかについて調べた。その結果、彼らの社会生活年齢は5歳3ヶ月であったが、自閉症児の予後像にはばらつきがあり、就職している者が予後像が良かった。さらに就学前に集団生活の経験を全く持たない者の予後は、多少ともそれを経験した者よりも悪い傾向があった。また、施設や病院へ収容されている者ははじめから重症な例が多く、それらが収容の結果ではないと考えられた。</p>

44 発達障害児をもつ母親のストレス要因 () - 社会関係認知とストレス -	共著	1989.9.	小児の精神と神経 (29巻1-2号 pp.97-107)	<p>〔執筆〕蓬郷さなえ、中塚善次郎。本人は企画とデータ解析を担当。</p> <p>概要：研究の目的は第1に母親のストレスの感じ方とパーソナリティの一部である社会への適応性（協調性、客観性、非攻撃性）との関連を調べることで、第2に母親のストレスと身近な社会関係に対する感じ方との関連を調べることである。得られた結果は、第1の目的に対しては、ストレスは協調性と客観性に多大な影響を及ぼしており、社会に対する認知をネガティブなものにしていること、第2の目的に対しては、ストレスの高い母親は楽しく明るい家庭と思えず、夫に対しても否定的であり、特に祖父母の存在が心理的負担にさえなっていることが明らかになった。</p>
45 音楽が自閉症児の血圧に及ぼす効果	共著	1990.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要 (4巻 pp.65-72)	<p>〔執筆〕原田和幸、中塚善次郎。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>概要：音楽が自閉症児の心理・生理的側面にどのような効果をもたらすのかを血圧を指標として測定した。自閉症児と非自閉症児との比較を行うことによって次のようなことが明らかになった。音楽聴取後の非自閉症児群の血圧が変化しなかったのに対して、自閉症児群では音楽聴取前の血圧に戻った。この結果から、非自閉症児は音楽の余韻が聴取後も残るのに対して、自閉症児では音楽の効果が聴取時にしか及ばないことが示唆された。</p>
46 自閉症児の発達段階とその特徴 - 潜在クラス分析法による津守式乳幼児精神発達質問紙の分析 -	共著	1990.3.	児童青年精神医学とその近接領域 (31巻4号 pp.1-9)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、蓬郷さなえ。本人はデータ解析と論文執筆を担当。</p> <p>概要：自閉症児の発達段階（発達の質的な区切り目）が何歳頃に存在するかを明らかにするために、3歳から12歳の自閉症児82人と、それに年齢ごとに人数と発達水準をマッチングさせた非自閉症の障害児82人に、津守式精神発達質問紙1～3歳用と3～7歳用を実施し、得られた1-0パターンを2つの群別に潜在クラス分析した。その結果、次のことが明らかになった。両群とも発達段階は2つ存在する。そして、段階の区切り目は自閉症児群では8歳頃に、非自閉症児群では9歳過ぎにある。発達の低い段階では両群はよく似た特徴をもっている。しかし、発達の進んだ段階では、両群の特徴は異なっており、非自閉症児群では5領域の得点のばらつきが相対的に小さくなってバランスがとれてくるのに対して、自閉症児群では低い段階の特徴がそのまま保たれている。しかし、自閉症児群の2つの段階間の差を領域ごとに見ると、社会の伸びよりも探索と言語の伸びが大きい。これはその基本障害が認知・言語障害であるとする説を支持しないものである。</p>
47 発達遅滞児の運動発達のマイルストーン：粗大運動からの検討	共著	1990.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編 (5巻 pp.117-125)	<p>〔執筆〕大西久男、蓬郷さなえ、原田和幸、中塚善次郎。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。</p> <p>概要：目的は粗大運動の発達のマイルストーンの超過時期を再考するとともに、発達障害のタイプによってその通過時期がどうかを検討することである。そのために調査1ではマイルストーンを0歳から14歳にわたる発達障害児49名と、健常児1305名に遡及的に調査し、調査2では1歳半検診の受診者168名に同様の調査を行った。調査1では、健常児の基準値から見ると、自閉症児は全てのマイルストーンで遅れていた。また、その他の障害種ではこれまで言われ</p>

				てきた通りの結果が認められた。次に調査2では、調査1とほぼ一致した結果が見られており、調査1の結果が信頼性における資料であったことが確認された。	
48	ワロン理論による自閉症児・障害児理解	共著	1990.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(4巻pp.57-64)	〔執筆者〕中塚善次郎、原田和幸。本人は論文執筆を担当。 概要：N式自閉傾向測定尺度における社会性因子は自閉症児の基本障害を表すのであるが、ワロン理論における姿勢・緊張系(情動)の機能から自閉症児の社会性障害を概観することによって、他の症候のメカニズムも理解することができる。このことは、人間の精神発達における情動機能の重要性をも意味しており、自閉症児だけでなく障害児教育において、この情動の教育を無視することは出来ない。
49	新しい障害児「響育」理論の確立をめざして	共著	1990.3.	鳴門教育大学研究紀要教育科学編(5巻pp.139-159)	〔執筆者〕中塚善次郎、松田文春。本人は論文執筆を担当。 概要：まず障害児教育の実践に強い影響を及ぼしている、2つの心理学理論を考察し、その限界点を示した上で、障害児教育のための新たな哲学的理論を確立する必要性を述べた。次に近代哲学史における自覚の問題を論考し、その自覚の諸契機の弁証法的統一として響存哲学が展開された。さらに新しい障害児「響育」を実践していく上での基本的姿勢を指摘した。
50	幼児の情動表出尺度の構成	共著	1990.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(4巻pp.49-56)	〔執筆者〕蓬郷さなえ、中塚善次郎。本人は企画を担当。 概要：嬉しい時、怒った時、嫌な時、恐ろしい時などについて子どもがどのような行動をするかを問う110項目の質問項目を0歳から5歳までの保育園児375名について、担任の保育士に3件法で評定してもらい、そのデータを因子分析して次の8つの尺度を構成した。1.対人攻撃、2.対人威嚇、3.対人拒否、4.対人回避、5.自己歓喜、6.自傷行動、7.パニック、8.自己退行。これらの尺度は情動の質ごとではなく情動のもつ行動の機能として構成されているのが特徴である。前四者は社会的機能をもった表出行動に関係し、後四者は生物学的に規定された表出行動に関係した尺度であることがわかった。
51	障害児響育要諦 - 教師と親のための指針 -	単著	1991.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(6巻pp.41-57)	概要：筆者はこれまで、ワロン理論によって自閉症児ないし障害児を理解しようと試みたり、ワロン理論と鈴木の響存哲学の統合による新しい障害児「響育」理論の確立を図ろうと試みてきた。その概要を述べ、健全者 - 障害者平等論を実現させていくには、一人ひとりの心に「人の心を感じるころ」を育てていく道が是非とも必要であることを述べた。その方向性を示した後、教師や親が障害児に実際に接していく上での心構えを、十か条に要諦として示し、解説を行った。
52	障害児教育に於ける人権論再考	共著	1991.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(5巻pp.57-64)	〔執筆者〕松田文春、中塚善次郎。共同研究により本人担当部分抽出不可能。 概要：今後のより充実した障害児教育の根本理論の基礎を得るために、障害児の人権を視点にして、現行の教育体制の限界を探ろうとした。初めに、現代の障害児教育体制の形態の要因となってきた歴史的過程を概観し、現代教育体制が抱える問題点を提示した。次いで、現行

				障害児教育の根拠となる法制度の構造とその現実的解釈を、障害児の基本的権利という立場から明らかにし、これからの障害児教育のための本来的解釈として筆者らの立場を述べた。
53 精神薄弱養護学校在籍者にみられる自傷行動とその関連要因	共著	1991.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(5巻 pp.45-55)	〔執筆〕原田和幸、辻行雄、中塚善次郎。本人は研究の企画と解釈を担当。 概要：精神遅滞児に見られる自傷行動は多様なものであり、その多様性を分析していくことは行動の理解のためには必要不可欠である。自傷行動に関する従来の仮説の多様性もおそらくそれを反映していると思われる。本研究では自傷行動の形態、頻度、強度、生起する対人状況などについて調査し、障害種別や対象児の適応レベル等によってどのような違いがあるかについて分析を行った。その結果、自傷行動の形態によって生起する対人状況等に違いがあること、また障害種別では自閉症児群が他の群に比べて多種の自傷行動の形態を示すことが分かった。また、形態に関する13項目を因子分析した結果、固有感覚的自傷行動因子と、体性感覚的自傷行動因子が得られた。
54 Relations between Autistic Symptoms at six year of age and social maturity : A restrospective examination	共著	1992.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(7巻 pp.399-412)	(執筆) Zenjiro NAKATSUKA, Sanae TOMAGO, Hisao OHNISHI, Hiroshi GOTO 概要：6歳時点での自閉症候が成長後の社会生活能力をどれほど予測しうるかを調べるのが目的である。そのために31名の自閉症児を対象に、6歳時点での症候を遡及的にN式自閉傾向測定尺度で捉え、現在の社会生活能力を新版S-M社会生活能力検査で捉え、両検査間で正準相関分析を行った。その結果、第1正準相関係数のみが有意であり、それに対応した構造行列から、成長後の社会生活能力を予測する場合、N式自閉傾向測定尺度の非言語通心、言語通心、社会性一般、高級感覚の各尺度に属する異常行動が見られているほど適応は悪く、特定刺激への固執、特異な能力を含む同一性保持因子に属する行動が見られているほど適応が良いことが分かった。このことから幼児期の自閉症候を予後予測因子としてみる方法が示された。
55 自閉症児の情動表出行動の特徴 - ダウン症児と精神遅滞児との比較 -	単著	1993.2.	発達障害研究 (15巻1号pp.55-62)	概要：ワロン理論に基づいて構成された「幼児情動表出尺度」を発達障害児3群(自閉症、ダウン症、精神遅滞)に実施し、N式自閉傾向測定尺度と津守式乳幼児精神発達質問紙との相互相関を求めた。その結果、対人的情動表出行動は発達と関連があることがわかった。また、自閉傾向が強いほど対人情動の表出が少ないこと、さらに情動には二つの機能があることが指摘された。
56 情動・感情の教育 - 同和教育における意義 -	共著	1993.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(7巻 pp.53-58)	〔執筆〕清重胎一、中塚善次郎。共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 概要：現在の同和教育は認識論中心に展開されがちであることに対し、その正しい方向性として「情動・感情の教育」を提唱した。また、差別の生まれる機制を考察し、それを越える心の教育として「宗教的情操」の高まりを強調した。
57 人間精神の心理学モデルによる精神病理の解釈	単著	1993.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(7巻	概要：主に精神分裂病と躁うつ病の病理を説明するために、新たに構築された人間精神の心理学モデルが適用された。それは、人間の生を

			pp.59-65)	自己と他己との弁証法的運動として捉えるもので、5つの精神領域のそれぞれに自己と他己とのモーメントをなす、1つずつの精神機能を仮定している。5つの中、自己モーメントとして自我+情動機能と、他己のそれとして人格+感情機能のバランスの崩れとして2大精神病が説明できるとし、精神病理の解釈に新しい道を示した。
58 児童・生徒の心理的ストレス() - ストレス尺度の構成 -	共著	1993.2.	鳴門教育大学実技教育研究(3巻pp.69-79)	〔執筆〕赤尾泰子、大西久男、中塚善次郎他4名。共同研究により本人担当部分抽出不可能。 概要：高校生が日常生活の上で、そのような心理的ストレスに悩まされているかを測定する方法として、ストレス尺度を開発することが目的である。まず、普通科高校3年生89名を対象にして150項目からなる質問紙調査を行い、得られたデータを因子分析した結果、12個のストレス尺度が構成され、解釈された。
59 障害を持った子どもの母親のストレス - 障害認知時のストレスの構造と規定要因の検討 -	共著	1993.3.	鳴門教育大学研究紀要(8巻pp.183-198)	〔執筆〕大西久男、中塚善次郎、宮崎令子。本人は研究の企画、解析を担当。 概要：わが子が障害児であるとわかった時の母親の心中はこれまで明らかにされておらず、母親の心理援助やその軽快していく過程を追う上では心理構造を客観的に把握する方法が望まれる。そこで障害児をもつ母親に遡及的に質問紙調査し、そのデータを因子分析した。その結果、5つの尺度が構成され、次に現在の母親のストレスとの関連が検討された。
60 人間養育要諦 - 教師と親のための指針 -	単著	1993.3.	鳴門教育大学実技教育研究(3巻pp.81-106)	概要：障害児教育は教育の原点である、と言われる。それは、障害児が人間としてぎりぎりのところで存在しており、そうした人への教育がどんなものであるかを考えてみるのが、教育を考える原点である、ということの意味している。先に障害児養育要諦を表したが、本稿ではもう少し一般化して人間養育要諦として十か条にまとめて示した。なお、これは「人間精神の心理学モデル」の教育への応用でもある。
61 哲学を取り戻すべき心理学 - 人間「精神」の心理学構想 -	単著	1993.3.	鳴門教育大学研究紀要(8巻pp.199-213)	概要：今や心理学は哲学の扱った「人間はいかに生きるべきか」という価値の問題から遠ざかってしまった。その問題点を指摘し、他者と自己の統合として人間が生きていることを取り上げ、両者の相互作用の在り方の概念を含んだ心理学が要求される点を論じた。その上で人間精神の心理学モデルが提唱され、個々の要素が解説された。
62 『ユング心理学』ノート - 自己・他己理論を通して見えたもの -	単著	1994.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(9巻pp.313-332)	概要：心理学理論としていま最も注目を集めているユング心理学を、筆者の提唱する「人間精神の心理学モデル」によって見た時に、ユング心理学の基本的な概念が人間理解にとってどういう意味を持ち、それらが、筆者の自己・他己理論にどう関連づけられるかを検討した。ユングは、無意識に「マナ識」に当たる個人的無意識と「アーヤ識」に当たる集合的無意識を仮定し、この集合的無意識に潜む「原始類型」に他者性を求めようとしたが、それはあくまで「自己」の中に「他己」を求めようとするもので、筆者の提唱する「他己モーメント」が決定的に欠落していることが指摘された。さらに、その欠陥を克服すべく、筆者の無意識論を展開

63 精神分裂病の基本障害と諸症状 - 自己・他己理論による了解の試み -	単著	1994.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(8巻 pp.95-104)	<p>した。</p> <p>概要：筆者の構築した自己・他己理論を適用して、精神分裂病の基本障害と諸症状の解釈を試みた。分裂病の基本障害は、自己モーメントに対して他己モーメントが相対的に衰退し、やがて喪失することであると仮定された。その結果、その病者にも基本的に見られるのは「外界への自己定位の不能性」であることが分かった。また、こう仮定することによって症状の整理が可能になった。つまり、プレコックスゲフェールは「人の心を感じるこころ」である感情の障害であり、幻覚は感覚の、妄想は認知の、作為体験は自我の、それぞれ障害であると解釈された。</p>
64 自己・他己検査の尺度の構成	共著	1994.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(8巻 pp.73-80)	<p>【執筆著】赤尾泰子、中塚善次郎、金山貴美子。本人は企画、項目作成、因子分析、論文構成を担当。</p> <p>概要：中塚の構築した自己・他己理論の仮説を実証するために、自己と他己を測定する尺度の開発を試みた。そのために、「～ありたい」という価値的目標を問う78の質問カードを作成し、Q技法の分類法に従って9段階に分類してもらった結果を主成分分析した。その結果、1. 出世追求、2. 趣味追求、3. 社会貢献、4. 秩序尊重、5. 欲望追求、6. 他者志向の6尺度が構成された。さらに、個人ごとの尺度得点を算出し、主因子法による因子分析を行った。その結果、1と2と5が自己を、それ以外が他己を測定していることがわかった。さらに、6尺度の妥当性を検討するために、個人の得点をZ得点に換算し、大学生、院生、教員の各群別に比較した。その結果、各群による特徴が見られ、本検査の有効性が検証された。</p>
65 障害児(者)をもつ家族	単著	1994.5.	教育と医学(42巻5号 pp.58-63)	<p>概要：障害児(者)とその家族は、周知のように大きなストレスにさらされている。養育の中心的存在である母親が感じるストレスには具体的にどのような種類があり、そのストレスを規定する要因にはどのようなものがあるか、筆者の研究を通じた知見が展開された。まず、ストレスには5種類のものがある。1. 社会的圧迫感、2. 養育負担感、3. 不安感、4. 両育探求心、5. 発達期待感である。さらに、これらのストレスの規定要因として、子どもの障害種、子どもの年齢、家族関係の3点に関してストレスの特徴が述べられた。最後に、質問紙により捉えられた、障害児をもつ両親の養育態度の特徴を述べ、親の心の持ち方について教示した。</p>
66 自閉症児における認知 - 言語教育のあり方	共著	1995.3.	鳴門教育大学実技教育研究(5巻 pp.107-119)	<p>【執筆著】藤川清美、中塚善次郎、大西久男。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。</p> <p>概要：現在、教育現場では自閉症児への認知 - 言語教育は、いわゆる、従来の健常児に対するのと同様な「お勉強」を強いるものから、何々法といった特定の方法を全ての自閉症児に無差別に与えるものなど、かなり不適切と思えるもので満ちている。本研究は、自閉症児の基本障害を他者との情動の共有の障害とみなし、それを育てることを中心にした「情動の教育」の必要性を主張し、それに基づく認知 - 言語教育を提案している。</p>

67 知的障害者に人格の完成はあるか	単著	1995.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(10巻 pp.243-258)	概要：現在、知的障害者は、高等教育からは完全に締め出されている。憲法では、全ての国民は教育を受ける権利をもつとされ、教育基本法では、教育の目的として人格の完成が規定されている。しかし、現実的に知的障害者が高等教育の場から締め出されているのは、知的障害者には人格の完成が不可能と考えられているからだと思われる。本論文では、そうした考え方が間違いであることを指摘し、知的障害者が、いかにして人格の完成にいたれるかについて述べている。
68 自己・他己双対理論に基づく人間精神発達理論 - Stern理論の検討による細密化 -	単著	1996.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育科学編(11巻 pp.309-331)	概要：自己・他己双対理論に基づき、情動＋自我および感情＋人格という、広範で包括的な精神機能の発達を扱った、独創的な発達モデルが示された。このモデルでは、発達段階が1.胎児期、2.乳児期、3.幼児前期、4.幼児期後期、5.児童期、6.青年期に分けられ、1・3・5期が他己充実期、2・4・6期が自己充実期と想定されており、成長に連れて二つの時期を交互に経過しながら、自他の弁証法的統合を繰り返しつつ、精神が発達していくと想定されている。そして、Sternによる発達理論の批判的検討を通して、この自己・他己双対理論に基づく発達モデルの細密化が行われた。
69 障害児教育を支えるコミュニケーション() - 「コミュニケーションとは何か」自己・他己双対理論に基づく検討 -	共著	1996.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(10巻 pp.41-50)	〔執筆者〕中塚善次郎、上松育代、木村みどり、大田雅美。本人は基本哲学の提供、研究の企画、論文の執筆を担当。 概要：コミュニケーションとは何かの問題について、自己・他己双対理論の立場から検討を行った。コミュニケーションとは、人間が他者に定位してはじめて精神的健康や福祉・安寧を得ることができる存在であるという、基本的な在り方に関わる概念であることと、心理学的には自己と他己の弁証法的統合の過程として捉え得るものであることを述べた。また、コミュニケーションの社会・心理的機構を具体的に明らかにし、さらに、コミュニケーションの現実的意味と具体的問題点として、コミュニケーション障害としての精神病理と、学校教育現場における諸問題について検討した。
70 障害児教育を支えるコミュニケーション() - 重度・重複障害児教育と障害児をもつ親の援助に関する文献の検討 -	共著	1996.3.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(1996年10巻 pp.51-60)	〔執筆者〕上松育代、木村みどり、大田雅美、中塚善次郎。本人は研究の企画と構成を担当。 概要：同名論文()の考え方に従って、重度・重複障害児のコミュニケーションの問題を扱った文献と障害児をもつ親への支援を扱った文献とを検討した。前者では、子どもの側の発達を主眼とする研究と、こころを重視し、関わる側の問題も扱っている研究に分けて検討した。後者では、一般的な社会支援の研究動向を概観した後、障害児をもつ親への支援を取り上げた論文の中で、特に、こころの通じ合いである情緒的支援にふれた記述があるものを中心に検討した。
71 まなざしの人間精神学	単著	1997.11.	あたらしい眼科(13巻11号 pp.1645-1649)	概要：自閉症児がアイ・コンタクトをとれない原因を、自己・他己双対理論と人間精神の心理学モデルによって説明することを通じ、人間存在の本質的な意味と、まなざしがもつ人間的な意味について検討を行った。そして、まなざしに関する「邪眼」と「慈眼」という言葉を取り上げ、邪眼が自己に、慈眼が他己に対応していることを説明した。さらに、多くの人々がこ

				ころを磨く修行をすることで慈眼を取り戻し、他己社会を実現することの必要性を述べた。
72 障害児教育を支えるコミュニケーション () - 障害児支援を含むボランティア活動を規定する家庭養育環境 -	共著	1997.1.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(11巻 pp.103-110)	〔執筆〕木村みどり、大向裕美、大田雅美、倉橋雅子、上松育代、中塚善次郎。本人は研究の企画と構成を担当。 概要：学生のボランティア活動への熱心さと小さい頃に受けた家庭の養育環境との間に関連がどうあるのかを調べることを目的として、大学生を対象とした質問紙調査を行った。結果の分析から、ボランティア活動の熱心さを示す測度として3測度が得られ、家庭の養育環境質問項目から4つの尺度が構成された。前者の3測度は、活動の参加意志・回数、活動の分野の選択数、活動のきっかけ(動機)の選択数からなり、後者の4尺度は、1.社会性、2.行儀作法、3.子ども尊重、4.生活自律からなる。両変数群間の相関値から、社会性の尺度がボランティア活動を規定する要因としてより重要であることが分かり、親のしつけによって社会性を育てることが大切であることを述べた。
73 障害児教育を効果的にするためのコミュニケーションの研究 () - 自閉症児の時間障害を理解するための時間論の構築 -	共著	1997.1.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(11巻 pp.75-84)	〔執筆〕中塚善次郎、大田雅美、大向裕美、木村みどり、上松育代。本人は基本哲学の提供、研究の企画、論文執筆を担当。 概要：自閉症児の症候を精神病理学的に理解するために、自己・他己双対理論に基づいて新たな時間論を構築した。これは、自己が未来を、他己が過去を形成する働きを担い、自己(未来)と他己(過去)の弁証法的運動とその統合の過程が現在を生み出していくと考えるものである。自己が未来を形成するのは、自己の可能性を追求して生きていこうとする期待や予期の働きにより、他己が過去を形成するのは、他己が自分のなしたことを客観化する働きによる。また、未来と過去の統合である現在は、自我・人格の精神機能によって営まれるものである。
74 障害児教育を効果的にするためのコミュニケーションの研究 () - 同名論文 ()で構築した時間論による自閉症児時間障害の理解 -	共著	1997.1.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(11巻 pp.85-94)	〔執筆〕大田雅美、木村みどり、大向裕美、上松育代、中塚善次郎。本人は研究の企画と構成を担当。 概要：同名論文()で構築した時間論に基づき、社会性障害をもつ自閉症児の、時間障害の説明を行った。自閉症児の記憶想起現象と、精神分裂病や心的外傷後ストレス障害の記憶想起現象との比較を行うことによって、自閉症と精神分裂病は、どちらも社会性の障害であり、他己障害であることを明らかにした。他己障害では、過去を喪失していることになり、現在も存在しないために、未来へ安定を求めて同一性への固執が起こる。また、自閉症児のなした行為の記憶は、客観化できずいつまでも情動的色彩を帯びたまま自己の中に保たれる。こうしたことから事例記述を解釈し、さらに教育にあたって考慮すべき事柄を述べた。
75 知的障害児の社会・生活行動 () - 新版 S - M 社会生活能力検査に見られる養護学校の実態とその意味 -	共著	1997.3.	鳴門教育大学研究紀要(12巻 pp.191-204)	〔執筆〕中塚善次郎、大向裕美、赤尾泰子、木村みどり、岩井勉。本人は研究の企画と論文執筆を担当。 概要：精神薄弱養護学校在校生の社会・生活行動を新版 S - M 社会生活能力検査で調べた結果、6つの領域で多少のバラツキはあるが、高等部でも再重度児では社会年齢が2～3歳にしか達せず、重度児でも4～6歳程度にしか発達

				<p>しないことが明らかになった。こうした子どもたちはほとんど社会的に自立することができず、一生にわたる援助を必要としている。このような事実が教えるのは、他者に援助することが人間の存在の本質である、ということである。</p>
76 自閉症児における左半球障害仮説の提示 - コミュニケーション障害の大脳生理学的基礎をより深く理解するために -	単著	1998.1.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(12巻 pp.21-30)	<p>概要：本論文の目的は、自閉症児では大脳左半球機能系が障害されているとする、新しい仮説を提示することである。大脳生理学者のエツクルスが述べているように、ヒト科になって愛他主義が発生し、それに連れて左右半球に機能差が生じたが、その左右半球に、自己・他己双対理論で述べられる自己と他己が対応していることを明らかにした。次いで、左半球は人格 + 言語 + 運動 + 感情(人の心を感じるこころ)を司り、右半球は自我 + 認知 + 感覚 + 情動を司るが、自閉症児では左半球機能系が障害されていると考えられることを、これまでの研究を引用して明らかにした。</p>
77 時間性の学としての倫理学 - 自己・他己双対理論による革新 -	単著	1999.3.	鳴門教育大学研究紀要(13巻 pp.1-15)	<p>概要：大谷愛人著『倫理学講義』を取り上げ、自己・他己双対理論およびそこから構築された時間論に基づいて、倫理学の革新に関する考察を行った。大谷は、現代の倫理学がカオス状態の中をさまよう学問に陥っていることを指摘しているが、そうってしまった基本的な原因は、現代人が自己肥大と他己萎縮を進行させ、他己の領域に属する信ずべき価値や目的を喪失したところにある。また、理性主義や個人主義がこの傾向を加速させている。こうした中で、自己・他己双対理論は、自己と他己の統合という、人間の根源に帰ることこそを、現代のあるべき姿として示すものである。また、大谷の言う「今日の時代の倫理的意味」を的確に捉えることができ、「倫理学が求める特殊性」も十分に満たすものである。</p>
78 人権問題に関する基礎的研究() - 若干の哲学的・「人間精神学」的考察 -	共著	1999.1.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(13巻 pp.29-38)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、岩井勉、佐々木博人。本人は研究の企画と論文執筆を担当。 概要：「人間精神学」を背景として、人権問題に関し、次の7章からなる考察を行った。差別解消のために、人間存在についてどう考えるべきかについて、いじめの心理メカニズムについて、人間の「真の平等」を実現するものは愛であることについて、子どもの人権は大人が愛と自由を与えていれば自然に実現できるものであることについて、人権の主張には義務の遂行とのバランスが大切であることについて、自由と平等と友愛との関係はどうあるべきかについて 民主主義の欠点である衆愚政治を克服するにはどうしたらよいかについて。</p>
79 学道要諦 - 教員養成系大学・大学院学生のための指針 -	単著	1999.3.	鳴門教育大学研究紀要(14巻 pp.149-162)	<p>概要：この要諦はもともと、平成2年度初頭、当時の学生・大学院学生の勉学・学問に対する態度があまりにも出来ていないことを痛感し、基本的な心構えと姿勢を教示するために「大学・大学院学生心得10条」として作成したものであり、以来筆者の授業を履修した学生には毎年配布を行ってきた。この10条の作成を意図するに至って、既に10年以近い年月が流れたが、その必要性は本学学生に限らず、ますます増大しているように感じられ、公表することとしたものである。なお、これまでに発表してきた「障害児響育要諦」「人間響育要諦」と、こ</p>

				の学道要諦を合わせて「響育関係3要諦」としたい。
80 「人権と平等論」ノート	共著	1999.11.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(14巻pp.93-102)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は研究の企画と論文執筆を担当。 概要：自己・他己双対理論と、これまでに展開した人権と平等に関する議論を基礎として、新たに、次の5章からなる考察を行った。人間が真に平等に至ることは、生死を明らかにすることによってだけ可能であることについて、大乘起信論の考える平等とは何かについて、アメリカの社会、精神病理がなぜ起こるのかについて、実母殺しから考えられる、平等とは何かの問題について、尊属殺重罰規定の合憲および違憲判決から考えられる、平等概念の哲学的意味について。
81 障害児をもつ母親のストレスと社会支援	共著	2000.12.	鳴門教育大学学校教育研究センター紀要(14巻pp.83-92)	〔執筆〕小川敦、木村みどり、中塚善次郎。本人は研究の企画とデータ解析を担当。 概要：障害児をもつ母親のストレスを軽減・解消しうる社会支援のあり方を探ることが本論文の目的である。質問紙調査の結果を分析した結果、高ストレスの母親は主に家庭以外の行政などによる支援によって、低ストレスの母親は主に家庭の人間関係によって、それぞれストレスを解消する傾向が強いことがわかった。こうしたことから、母親のストレスを軽減・解消するためには、情緒的な温かい心のつながりという、コミュニケーションを基盤とした社会支援が必要であることが明らかとなった。また、障害児やその家族が幸せに生きていける社会を実現するためには、現代のような自己社会から、他己社会への転換が不可欠であることを述べた。
82 こころの教育論 - 自己・他己双対理論による立論 -	共著	2000.3.	鳴門教育大学研究紀要 教育学編(15巻pp.77-88)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は研究の企画と論文執筆を担当。 概要：青少年による殺人などの凶悪犯罪の急増や、いじめ・学級崩壊といった教育荒廃を概観し、そうした現状に対する方策を中央教育審議会がまとめた答申「新しい時代を拓く心を育てるために」を取り上げた。そこでは、「心の教育」「生きる力」がキーワードとして示されているが、中教審の根本的な姿勢は、自己・他己双対理論から見ると自己肥大・他己萎縮の傾向をますます強める危険性を含んだものであり、そのままでは真の意味で「心を育てる」教育が実現され得ないことを述べた。そして、「こころ」とは、情動 - 感情の動きを指す言葉であり、したがって「こころの教育」は情動と感情の教育であること、それはすなわち自分の情動を制することと、他者の心を感じることをもつこと、の二つの実践に集約されることを説明し、そうした教育実践を可能にする社会のあり方にも言及した。
83 学習障害児の教育実践における問題点とその克服 - 人間精神の心理学モデル及び自己・他己双対理論による検討 -	共著	2000.3.	兵庫教育大学大学院連合学校教育実践学論集(1巻pp.1-12)	〔執筆〕小川敦、中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：日本における学習障害児の研究と教育実践を概観し、実践における「認知機能の治療教育」と「ソーシャルスキル・トレーニング」を特に取り上げて、それらの指導は教師や子どもの人間性から遊離したものであってはならないことを述べた。そして、学習障害を捉える際には子どもの人間性全体を捉え得る包括的な視

84 学習障害児の教育を効果的にするコミュニケーションの研究 - 学習障害に関する心理学的、教育学的、哲学的考察 -	共著	2000.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(15巻 pp.57-66)	<p>点が必要であることを主張し、その上で、独自の心理学モデルに基づく自我 - 人格機能障害仮説を提唱した。さらに、従来の能力概念を超えた教育が構築されるべきことについて論じた。</p> <p>〔執筆著〕小川敦、中塚善次郎、河野正雄、米延光恵。本人は基本哲学の提供、研究の企画、データ解析を担当。</p> <p>概要：筆者らが提唱する学習障害の「自我 - 人格機能障害仮説」について説明し、仮説検証のために行った質問紙調査と結果の分析によって「学習と行動の適応性尺度」が構成され、同尺度を用いた研究から筆者らの仮説が支持されたことを述べた。また、この仮説に基づいて、学習障害児に対する望ましい教育の在り方を、心理学的、哲学的に考察した。そしてそれは、従来の能力概念や認知一言語の偏重を超えて、「情動の共有」を基盤とした「情育」「響育」であるべきことを主張した。</p>
85 現代民主主義の欠陥とその克服 - 自己・他己双対理論による検討 -	共著	2000.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(15巻 pp.111-120)	<p>〔執筆著〕中塚善次郎、小川敦、清重友輝。本人は研究の企画と論文執筆を担当。</p> <p>概要：日本の現状について、経済、政治、家庭、農業、学校、倫理・道徳など、社会のあらゆる側面で崩壊現象が見られることを述べ、その原因を探究するために、民主主義とはいかなる制度かを、自己・他己双対理論の立場から検討し、それを克服する道を提示した。民主主義は基本的に他己を欠いた、自己追求の制度である。欧米ではキリスト教によって他己が保存されてきたが、日本は明治初期に仏教を失い、戦後に神道と儒教を失って、全ての他己となる思想を喪失した。そのため、日本には伝統も規範性もなくなり、「自己中心」の人が圧倒的となって、社会は崩壊の危機に瀕している。この窮地を逃れる道は、他己となる信仰を取り戻す以外にはないと考えられる。</p>
86 古代ギリシャにおける民主制終焉の理由	共著	2000.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(15巻 pp.121-130)	<p>〔執筆著〕清重友輝、小川敦、中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。</p> <p>概要：民主主義は近代国家の主要な政治原理であるとともに、その中核である人権、平等権、自由権の尊重は政治のみならず多岐の分野にわたって浸透している。本論文では現代社会の抱える病理の原因を民主主義に求め、人類史上最初の民主制であるアテナイ民主制に注目して、現代との比較の中で民主主義の問題点についての考察を行った。その結果、民主主義は自己に片寄った思想であり、他者性を喪失させ、伝統を崩壊させて、社会秩序に悪影響を与えるという結論を得た。</p>
87 老子の精髓・神髄 ()	単著	2001.3.	鳴門教育大学研究紀要(16巻 pp.7-21)	<p>概要：老子は、釈尊、キリスト、ソクラテスと共に、中塚が「四聖」と呼んでいる人たちの一人をなす人物である。その老子が書いたとされている『老子』から、いくつかの章を取り上げて解説を行った。この()では、以下の8つの章を解説した。1.道と名と無と有(第一章)、2.相対と絶対(第二章)、3.真の自分に成る(第七章)、4.道をとらえる(第十四章)、5.道を体得すると(第十章)、6.老子の言う悟りに達する(第十六章)、7.徳を体得した人の自内証(第二十一章)、8.天下の母と呼べるもの(第二十五章)。</p>

88 教育雑感() - 自己・他己双対理論を通して見えるもの -	単著	2001.3.	鳴門教育大学教育学会誌(16号pp.7-12)	<p>概要：自己・他己双対理論に基づいた、教育に関する以下の5つの章からなる論文である。 ・改革には思想と哲学がいる、 ・教育改革国民会議の座長発言、 ・真の道德教育とは、 ・家庭は教育の場ではない!? ・修行強要はおせっかい!?. 特に時事的な話題を取り上げ、政治的な問題やマスコミによる報道などを検討している。</p>
89 ジャン=ジャック・ルソーにおける「自然」の真意	共著	2001.3.	鳴門教育大学教育学会誌(16号pp.19-24)	<p>〔執筆〕清重友輝、中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：ルソーの思想の中核とも言える「自然」の概念を自己・他己双対理論によって検討し、その真実に迫ることを目的とした。考察の結果、ルソー思想が目指す方向性は自己の性を追求することにあり、自由、自我、主体、能動といった「自己」に関わるものが重要な価値を持つことが明らかとなった。ルソーが活動したのは封建制度の社会においてであり、その思想に「他己」の概念が欠けていたことにはやむを得ない面がある。自己肥大が顕著な現代においてルソーを評価するのであれば、彼が時代に抗ったのと同じように、他己の価値観を回復することが必要であると考えられる。</p>
90 引きこもり理解の新たな視点 - 自己・他己双対理論による検討と提言 -	共著	2001.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(16巻pp.121-130)	<p>〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：急増を続ける引きこもりについて、自己・他己双対理論による解釈を行った。検討の結果、引きこもりは、精神の一方のモーメントである自己がきわめて肥大し、もう一方の他己が極限にまで萎縮した結果現れる状態像であることを明らかにした。そして、この自己肥大・他己萎縮は、戦後の日本社会が信仰を失い、民主主義だけが唯一の思想として残されたことから、必然的に生じたものであることを指摘した。引きこもりの解消は非常に困難であるが、筆者らの提唱する「響育」「情育」によって他己を豊かに回復させる以外に方策はないことを提唱した。</p>
91 『エミール』における教育実践学論考 - 哲学的視座からとらえた他者性との関連 -	共著	2002.3.	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教育実践学論集(3巻pp.41-54)	<p>〔執筆〕清重友輝、中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：教育実践の根本には、教育者の掲げる哲学性があるとする観点から、『エミール』における哲学的精神への考察を行い、それを通じてジャン=ジャック・ルソーの教育論の意図と本質を明らかにすることを試みた。彼が教育の指標として示す、理性・自由・幸福・社会といった諸概念に対して、それぞれ考察を行った結果、彼の教育思想は自己側の観点から見れば優れた方向性を示しているものの、全体を通して他者性に欠けており、社会的存在としての人間への教育論としては不十分なものであるとの結論を得た。</p>
92 老子の精髓・神髓()	単著	2002.3.	鳴門教育大学研究紀要(17巻pp.9-23)	<p>概要：87で述べた同名論文の続編である。ここでも、『老子』の中から以下の8つの章を解説した(番号は()からの通し)。9. 死んでも亡ばないもの(第三十三章)、10. 道は隠れていて名前がない(第四十一章)、11. 聖人は為さなくて成る(第四十七章)、12. 為すことなくして為さざることなし(第四十八章) 13. 光に和</p>

				し、塵に同じくする（第五十二章）14. 聖人は（第五十八章）15. 道は万物の主（第六十二章）16. 聖人に則る人は貴い（第七十章）。
93 教員養成系大学・学部を目指すべき授業のあり方 - 授業を支える基本的姿勢 -	共著	2002.3.	鳴門教育大学授業実践研究（1号 pp.43-51）	〔執筆〕中塚善次郎・小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：現在進められている教育改革の方向性について、「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」が提出した報告書を取り上げて概観した。それによると、いまは、教育される側だけでなく、教育する側の教師もまた、「社会に役立つ有能な人材」として養成されることが期待されている。こうした基本的姿勢に立つ限り、教育荒廃を克服する真の改革はなされ得ないことを考察し、教育基本法にある「人格の完成」が、まさに教師にこそ望まれていることを述べて、そのための授業のあり方を論じた。
94 自由論（ ）	共著	2002.3.	鳴門教育大学教育学会誌（17号pp.17-25）	〔執筆〕清重友輝・中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：憲法にも規定されている「良心の自由」を取り上げ、主として近代的な自由概念への基礎的な論考を行った。考察を通じて明らかにされた近代的自由概念とは、自我の覚醒と深い関連性を有するものであり、自己の拡張を妨げる外的干渉を断ち切る役割を担うものであった。
95 ADHD児の教育実践に関する人間精神学的考察 - ASL（学習適応性尺度）によるLD児、MR児との比較を通して -	共著	2002.3.	鳴門教育大学教育学会誌（17号pp.1-10）	〔執筆〕小川敦、中塚善次郎、清重友輝。本人は研究の企画とデータ解析を担当。 概要：高い関心を集めているADHDに対して、自己・他己双対理論に基づく「自我 - 人格障害仮説」を適用することを提唱した。この仮説を検証するために構成されたASLを用いて、ADHD児、LD児、MR児のデータを収集し、分析した。三群の分析結果を比較検討した結果、MR群は最も安定した精神構造を示し、反対にADHD群は不安定さが際立ち、LD群はその中間の形を示した。これらの結果は、上記の仮説を支持するものであり、それに基づいてADHD児の特徴と望ましい教育実践のあり方を考察した。
96 ポストデモクラシーとしての「民和主義」	共著	2002.3.	鳴門教育大学教育学会誌（17号pp.11-16）	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：自己・他己双対理論による民主主義論を展開し、そこに見られる自己肥大と他己萎縮の問題を指摘した。その上で、日本に古来から伝わっている「和の精神」について、それが仏教思想の下での自己と他己の統合を指すものであったことを説明し、民主主義の問題点と限界を克服するためには、助け合い・譲り合い・分かち合い、宥和と寛容の精神を基本とする「民和主義」が望まれることを論じた。そして、それが可能となるには、他己をなす信仰を取り戻すことが必要であることを述べた。
97 精神遅滞と精神病の合併に関する新たな心理学的仮説の提唱（ ） - 自己・他己双対理論による精神病解釈および発病メカニズムに関する仮説 -	共著	2002.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要（17巻 pp.55-64）	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は研究の企画と構成を担当。 概要：精神遅滞児・者が精神病を発病する頻度は健常児・者に比べて高いと言われるが、これまで十分な研究は行われて来っていない。本論文では自己・他己双対理論に基づき、精神遅滞と精神病の合併について新たな仮説を述べた。

				()では、合併に関する先行研究と、精神病をめぐる今日の問題、および最近の研究動向を概観し、続いて中塚がすでに行っている精神分裂病と躁うつ病の解釈について説明した。これらを通じて、ストレス脆弱性モデルなどの新しい仮説も不十分な点が多いことが指摘され、人間の精神を自己モーメントと他己モーメントという弁証法的な二重性を帯びたものとして捉え、モーメントの一方が相対的に優勢になり、他方が劣勢になった結果、精神病を発病するという、中塚による解釈が有効であることを論じた。
98 精神遅滞と精神病の合併に関する新たな心理学的仮説の提唱 () - 同名論文 ()に基づく精神遅滞と精神病の合併に関する新仮説の提唱 -	共著	2002.12.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(17巻 pp.65-74)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は研究の企画と構成を担当。 概要：()に続き、精神遅滞と精神病の合併に関する新たな仮説を提唱した。中塚の心理学モデルから見た精神遅滞を説明した後、中塚が構築した発達理論を示し、精神病の病前性格や、環境要因の研究に関する考察を加えて、自己と他己の均衡が崩れる心理的メカニズムについての考察を行った。そして、ストレスによって情動にかかった負荷を解消する手段のいくつかを述べ、それは認知 - 言語と感覚 - 運動の能力によっており、その精神機能領域に障害がある精神遅滞では解消が困難で、情動 - 感情に直接影響を受けてしまい、その結果、自他の均衡が崩れやすくなることを説明した。
99 老子の精髓・神髄 ()	単著	2003.3.	鳴門教育大学研究紀要(18巻 pp.9-21)	概要：87で述べた()および92で述べた()に続く本論文では、『老子』の中の以下の6章について解説し、完結とした。17.天の網は広く大きい(第七十三章)、18.聖人は精神が十全である(第七十一章)、19.柔らかいものが強いもの(第七十六章)、20.聖人は賢さを現わそうと欲しない(第七十七章)、21.真理は反対のようにみえるもの(第七十八章)、22.聖人の道は為して争わない(第八十一章)。
100 教育に取り戻すべき「情動の共有」 - 自己・他己双対理論による提言 -	共著	2003.3.	教科教育学研究(第21集pp.73-89)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：現在、さまざまな教育荒廃現象が見られ、それに対応すべく教育改革が進められているが、見るべき効果は上がっておらず、改革の方向性も定まらないままに、対症療法的な方策が繰り返される状態に陥っている。このような問題を自己・他己双対理論の観点から概観し、それらの根本には、民主主義制度から起こっている、日本人の自己肥大・他己萎縮傾向があることを指摘した。この状況を克服するためには、こころの通じ合いである「情動の共有」を教育に取り戻し、中塚の言う「響育」を実現することが不可欠であることを述べた。
101 自由論 ()	共著	2003.3.	鳴門教育大学教育学会誌(18号pp.1-10)	〔執筆〕清重友輝・中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：94で述べた()に続くこの()では、「欲求と自由」を主要なテーマとした。欲求の追求が人間にもたらすものは、究極的には表面的な自由と内面的な束縛であるということを考察し、内面的な束縛とは、自己への執着心であり、エゴそのものである。真の自由と、それによる幸福とを考える際には、エゴからの解放こそが求められることを述べた。

102 「教育基本法改訂」 中間報告をめぐって () - 概要と問題点 -	共著	2003.3.	鳴門教育大学教育学会誌(18号pp.11-16)	〔執筆〕小川敦・中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：中央教育審議会が示した、教育基本法改訂に関する答申の中間報告案を取り上げ、日本の教育の方向性を自己・他己双対理論の観点から捉え、問題点を指摘して、望まれる在り方について提言を行った。()では、中間報告案に見られる根本的な問題が、「教育の目的」や「豊かな心」などについての普遍的な思想・哲学を欠いているところにあることを論じた。
103 「教育基本法改訂」 中間報告をめぐって () - 問題点の克服 -	共著	2003.3.	鳴門教育大学教育学会誌(18号pp.17-22)	〔執筆〕小川敦・中塚善次郎。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：上記()を受け、現代の教育荒廃を克服するためには、中央教育審議会の中間報告案に見られるような「人材育成」を中心とした考え方は、不十分で不適切であることを論じた。そして、現代のような行き過ぎた自己肥大を抑え、萎縮してしまった他己を回復させる教育を実現しなければならないことと、そのためには、まず教育をする側みずからが、人格を高める努力をする必要があることを述べた。
104 自殺の人間精神学的考察() - 従来の自殺学説と自己・他己双対理論 -	共著	2004.1.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(18巻pp119-128)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：近年大きな社会問題になってきている自殺について、自己・他己双対理論に基づく新たな解釈を行った。()では、日本における自殺の現状を概観した後、自己・他己双対理論のあらましを説明し、それに基づいて、これまでの自殺研究に関する考察をした。
105 自殺の人間精神学的考察() - 「人間精神の心理学モデル」による自殺の新たな解釈 -	共著	2004.1.	鳴門教育大学学校教育実践センター紀要(18巻pp129-138)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦。本人は基本哲学の提供と研究の企画を担当。 概要：()をふまえ、自己・他己双対理論の根幹をなす「人間精神の心理学モデル」に基づいて自殺の解釈を行った。自殺を、自己モメントの不全によるもの、他己モメントの不全によるもの、自我・人格の不全によるもの、という3タイプに大別し、それぞれ考察した。そして、自殺を予防し、回避するためには、自己と他己のバランスと統合、および各精神機能領域感の統合が保たれることが不可欠であることを述べた。
106 現代日本における規範意識の喪失 - 自己・他己双対理論による検討 -	共著		鳴門教育大学研究紀要(19巻印刷中)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦
107 教育雑感() - 自己・他己双対理論を通して見えるもの -	単著		鳴門教育大学教育学会誌(19号印刷中)	
108 他者性を組み込んだ新たな経済学の構築 - 自己・他己双対理論による基礎的考察 -	共著		鳴門教育大学教育学会誌(19号印刷中)	〔執筆〕中塚善次郎、小川敦
109 自由論()	共著		鳴門教育大学教育学会誌(19	〔執筆〕清重友輝、中塚善次郎

(上記以外学術論文 編)			号 印刷中)	
(その他) 1 2 3				